

充兵役

昭和十八年十二月 召集令状により

舞鶴海浜団に入団 館山海軍砲術学

校へ

昭和十九年一月 横須賀海兵団を経

て大湊海浜団へ

同 二月 千島列島北端占守島に上

陸 第五一警備隊所属

昭和二十年八月九日 ソ連参戦

同 八月二十日 停戦

同 八月二十五日 ソ連軍による武

装解除

同 十月 東シベリアマガダンに上

陸

昭和二十四年十月三日 舞鶴港に上

陸帰還

(滋賀県 林 憲一)

シベリア抑留は、私の生きる原点

愛媛県 寄岡 秀夫

一 現在の私

私は、本年五月、満七十八歳になりました。

結婚して五十一年、二男一女と六人の孫に恵まれ、夫婦揃って元気で幸せな毎日に感謝しております。

シベリア抑留から帰還し、いろいろな職業を経験した後、生きるために創業した金融業で五十二年。それを天職として会社を設立してから四十七年、会社は、グループを合わせると社員数約千四百人、株式を東証ならびにニューヨーク証券取引所に上場するまでになりました。

我がNISグループ株式会社は、近い将来「我が国中小企業金融分野で、業界ナンバー一の業績と社会的信用を構築して、本物のノンバンクになること」です。我が社は、更に一昨年七月、

中国上海に進出、日新租賃有限公司を設立し、リース業等を開業しました。

本年六月、取締役会で私は取締役相談役に就任しました。目下、創業者相談役はいかにあるべきか勉強しております。また個人的には、人のため世のため何をなすべきか模索しております。

二 終戦、そしてソ連の捕虜として抑留

昭和二十(一九四五)年八月、日本は、アメリカを始めとする連合軍に全面降伏し、終戦となりました。

満州国で従軍していた私たちは、日ソ中立条約を破って侵入して来たソ連兵に捕えられ、シベリア奥地へ連行されるわけですが、当初は、そのまま日本へ帰れるものと信じておりました。

今年の八月中旬に、厚生労働省から届いた「ソ連抑留帰還者個人資料」の写し(三月に請求していたもの)を見た時、「捕虜 寄岡秀夫兵長」の文字に、腹の底から怒りがこみあげてきました。

戦後の、私達関東軍将兵に対するソ連の行為、

仕打ちは、法的にも人道的そして歴史的にも許されることではありません。

しかし、私にとつては、青春時代に経験したシベリア抑留生活に耐えたことが、生きる原点となり、私の人生に大きな影響を与え続けてきました。

以下、「平和の礎」として、私の「シベリア抑留記」をまとめてみたいと思います。

三 シャブールの未完成収容所へ

一九四五年九月十九日、旧満州国の橋頭の飛行場で、武装解除となりました。

関東軍第五飛行隊の私達数百人は、牛馬以下の扱いと不安の中、五十日に及ぶ貨車生活を経て、十一月十日シベリアのシャブールの未完成収容所に連行収容されたのです。理不尽にも、哀れ私達は、人の住めない酷寒のシベリアで慢性飢餓と冬はシラミ、夏はアブやブヨの大群に苦しみながら重労働を強制されることになりました。

十五年前の六月初め、ヨーロッパ旅行の際、機上より眼下に広大で実に美しい雪のシベリアを眺

めた私は、地獄のような抑留生活が思い出され、涙が止まりませんでした。

四 シャブールでの強制労働

シャブールは、チタの西方四百キロ、外蒙古の近くで、エゾ松、カラ松の広大な森林地帯です。

一年の大半が冬で、十月には雪が降り始めますが、冬中、積雪は多くありません。六月には一斉に花が咲き、七月は夏、八月は秋と春夏秋冬が一度にやってくる感じです。零下五〇度の寒さになることも度々で、満州から送られた十頭の馬は、一冬で死にました。寒さに強い小柄の蒙古馬は、ツララ

の固まりになってもそりを引いてくれました。一度降った雪は、冬の間、解けることなく、凍土は岩より固くなり、墓の穴掘りは大仕事です。主食は、牛馬用の穀物の雑炊で、絶対量が不足、時には中身がほとんどないこともありました。飢えてくると心まで外道飢餓となり、人間の誇りや情けもなくなってしまうました。衛生面でも、未完成の收容所には風呂や洗濯場がなく、一冬、入浴出

来ないと衣服も体もシラミの巢となり、シラミの大群に食い殺される思いの越冬となりました。作業は伐採、搬出、製材、線路工事等で、私は三人一組の伐採が主の班、体重四十キロの私にも一人前のソ連兵のノルマが課せられるのです。いよいよ自分もお陀仏かと覚悟した私が、地獄の中から生還出来た唯一のよりどころは、「生きて帰って米の飯を腹が裂けるほど食いたい一心」への執着です。

五 二年の抑留で帰還できた幸運

一九四七年八月十日、ナホトカ、舞鶴を経て二年弱で帰還出来た私は、数多い抑留者の中でも極めて幸運であったと思います。まったく自由のない、一切の情報から遮断された、非人間的な生活からやっと解放されたのです。この喜びには、到底、筆舌に尽くし得ないものがあります。

痩せこけた私に、最敬礼をしてくれた親父の姿は、今なお忘れられません。

敗戦直後、日本人の食生活は極めて劣悪でした。

その中で両親の私に対する扱いは破格でしたが、何事もバランスが大事です。過食と栄養過多の私は、三カ月で体重九十キロに腫れ上がって、半病人となつてしまいました。

六 青春の悩み

体力が回復するにつれて困つた事は、女性が無性に恋しくなつたことです。しかし非力で将来に見込みのない若僧に声を掛けてくれる娘はいない。私もまた女性に声を掛ける勇気が出ませんでした。さらに困つた事に、今まで全く考えたことのない自分の将来が、急に心配になりました。即ち学歴、学問がない。知恵、才覚もない。技術も、金もない。我ながら見込みのない私に人並みの結婚や生活が出来るだろうか。思えば思うほど、不安と悩みはつきることがありません。果ては、神や仏はないものかと思う自分を私はつくづく嫌になりました。

七 前向き的人生(プラス思考)

悶々としていたある日、ふと思いついたのは、

「駄目で、見込みのない私にも一つや二つの取柄があるのではないか」ということです。

それからは、考え方をプラス思考に変えれば、自分の人生は変えられると思うようになりました。

二十一歳の若さ、シベリアを生き抜いた「運」と「ねばり」、特攻隊精神も残っていることに気がつくのと、希望と勇気が沸いてきました。多少なりとも、将来が期待出来るとなれば、我が身が可愛くなります。考えが前向きになると、先が開けて見えます。

即ち金がなければ、人一倍努力して作ればよい。恋人がいなければ、素晴らしい女性が恋人になつてくれるよう自分を磨けばよい。すべての答えは、その人自身の志にあり、そうなるよう努力することなどの結論に達しました。

幸い抑留生活によって、食べ物が好き嫌いがなくなりました。さらに、どんな人も国も、好き嫌いで見たり軽視してはならないと考えるようになり、また人生には、お金の通用しない時と場所が

あることも知りませんでした。

そして、私は、この世には「人に優る宝はない」と思うようになりました。

私の生きる哲学は、「人が好き、仕事が好き、お金儲けも好き」です。会社の経営理念は「人間尊重の精神と正直営業・誠実経営」であります。

私とNISグループの今日がある理由に、日本の敗戦と「シベリア大学」の体験に過ぎるものはないと考えています。

シベリアで非業の最期を遂げられた数万の同胞に、哀悼の誠を捧げ、微力ながら世界の平和と日本の繁栄に貢献することを誓い、心からご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

【執筆者の紹介】

生年月日 昭和三年五月十四日

出身地 愛媛県喜多郡内子町 父 源助

母 マサヨの五男

現住所 愛媛県松山市南町

勤務先 経歴

株式会社ニッシン 松山本社

昭和二十八年八月 金融業開業

昭和三十五年五月 株式会社日新商

事設立 代表取締役社長就任

昭和五十五年一月 株式会社日新ビ

ル設立 代表取締役社長就任

平成二年十一月 株式会社ニッシン

へ商号変更

平成三年三月 株式会社日新ビル

代表取締役社長就任

平成十二年六月 株式会社ニッシン

代表取締役会長就任

平成十三年五月 株式会社日新ビル

代表取締役社長就任

平成十六年一月 ニッシン債権回収

株式会社 取締役就任

平成十八年六月 株式会社ニッシン

取締役相談役就任

平成十八年十月 NISグループ株

株式会社へ商号変更（株式会社ニッシンより社名変更）

関係団体 愛媛県貸金業協会理事

最終学歴 愛媛県立大洲中学校

卒業年 昭和十九年中退

軍歴 昭和十九年四月 大刀洗陸軍飛行学校第一期特別幹部候補生として入校

昭和十九年十一月 錦州一六六七五飛行団第五練習隊入隊

昭和二十二年八月 シベリアより復員

員

家族構成 公恵（妻） 道正（長男） 邦彦（次男）

（男） みどり（長女）

趣味 読書、旅行、能

（愛媛県 山本 繁夫）

ソ連抑留中

哀しみと憤りの追憶雑感

愛媛県 東 義 之

国際法上の根拠も無視し、昭和二十（一九四五）年八月九日早朝、スターリンはアメリカによる原爆投下により、日本の無条件降伏のバスに乗り遅れまいと対日宣戦を布告し、満州全域に侵攻し、これにより関東軍、開拓団、開拓青少年義勇軍、在満邦人の悲劇の始まりである。火事場泥棒的な参戦により、全満より食糧（食料品）、衣料品は云うに及ばず、重工業施設品、他を連日連夜トラックにて自国に戦利品と称し持ち去り、同時にウラジオストク経由、東京ダモイと偽り、マンドリンなる武器のソ連兵の警備のもと、連日、気の遠くなる様な道程を連行され、ソ連の旧囚人施設跡に収容される。

齢八十有余年にして、今、六十年余の過去を思